泉鏡花の「高野聖」の文章について（三）

植　村　邦　正

The Characteristics of Expressions in Kyôka's Works (Ⅲ)

Kunimasa UEMURA

ま　え　が　き

第一稿において，単語使用上の特徴を取り上げ，第二稿において，語りことばとしての特徴を「敬譲表現」と「感動表現」の面から捉らえてみた．本稿では，文としての表現法と，文体の特徴について考えてみようと思う．

〔注〕以下の例文において，各文頭の数字は旺文社文庫本のページ数を示す．

表現法のいろいろ

(1)　印象的表現

印象的表現とは，事物の与える印象を種々の技巧でそのまま作品の上に表現することである．彼の場合，対象を，視覚的・聴覚的・触覚的に捉らえ，それを豊富な語いや巧みな筆運びによって描写している．

21あッというて飛び退いたが，それも隠れた．三度目に出合ったのが，いや急には動かず，しかも胴体の太さ，たといはい出した処でぬらぬらとやられてはおよそ五分間くらい尾を出すまでに間があろうと思う長虫（ながむし）と見えたので，やむことを得ず私（わし）はまたぎ越した，とたんに下腹（したッぱら）が突っ張ってぞッと身の毛，毛穴が残らず鱗（うろこ）に変わって，顔の色もその蛇のようになったろう，と目をふさいだくらい．

これは，道に横たわる大蛇を見ての印象を感覚的に捉らえたもの．「ぬらぬら」といい，「ぞッと身の毛……」というのは，視覚というより，触覚的に描いたというべきである．

24今度は蛇のかわりに蟹（かに）が歩きそうで草鞋（わらじ）が冷えた．しばらくすると暗くなった．杉，松，榎（えのき）とところどころ見分けができるばかりに遠い処から幽（かすか）に日の光の射すあたりでは，土の色がみな黒い．中には光線が森を射通す工合であろう，青だの，赤だの，ひだが入って美しい処があった．

これなどは視覚に訴えた表現で美しい．

29今朝一人の百姓に別れてから時の経ったはわずかじゃが，三年も五年もおんなじものをいう人間とは中を隔てた．

飛騨越えの山中で，蛇や蛭の大群に悩まされ，九死に一生を得た思いの僧が，馬のいななきを耳にし，ほっとしたときの情景描写であるが，これなども，恐ろしさに出合った時間は僅かであるのに，感覚としては三年も五年も人間界から離れていたように感じたことを，こんな簡潔な投げ捨てたような短句の中に印象的に表現した．

37松の木の細くッて度外（どはず）れに背（せ）の高い，……その中を潜ったが，仰ぐと梢（こずえ）に出て白い，月の形

はここでも別にかわりはなかった．浮世はどこにあるか十三夜で．
これは飛驒を越え，命からがら深山の孤家に辿りつき，得体の知れない美女に導かれて水浴に行く途中の感慨．道中が苦しかっただけ，僅か一日のことだのに浮世離れた感じを助動詞の「で」止めで余韻を引く描写をしている．
38（婦人は）艶麗に笑った．……まあ，お早くいらっしゃい……と向こうでいいながら衣服の片褄をぐいとあげた．まっ白なのが暗まぎれ，歩行くと霜が消えて行くような．
37と同じ場面．片褄（着物の裾の左右の端の片方）をまくしあげたので，美女の真白な脛がちらりとのぞくのを霜にたとえた．それが夕暮の暗さに紛れ，歩くとき薄明の光の角度によってふと見えなくなるのを，「霜が消えて行くような」と色彩感覚豊かに表現した．「まっ白なのが」の「の」という準体助詞で漠然と表現することによって，読者の想像をいよいよ広く逞しくする効果をねらっている．こういう準体助詞の用法は他にも多い．「ような」という連体止めの効果も十分出ている．
53馬はすたすたと健脚を山路に上げた．しゃん，しゃん，しゃん，しゃんしゃん，しゃんしゃん，――見る間に眼界を遠ざかる．……炉にくべた柴がひらひらと尖先を立てたので，婦人は衝と走って去る．空の月のうらを行くと思うあたり遙かに馬子唄が聞こえたて．
薬売の男が，欲念ゆえに魔性の女に馬と化せられる．その馬が女のそばを離れたがらず，動かないのを，女がはだかになって魔法をかけて動かせるところ．「空の月のうら」は，山の背に邪魔されて月のかげになって暗い向こう側の意．親仁が馬を引いて月のかげの道を馬子唄をうたいながら下山して行く光景を印象的に描写した。この文の前に，女が魔法をかけるときのすばやい動作を「兎は躍って」と形容し，そのあと，女が家の中に走り込んだのを，白うさぎと化した女が月にかえると見たてた幻想をもあわせ感じさせる描写である．
44手をあげて黒髪をおさえながら腋の下を手拭でぐいと拭き，あとを両手でしぼりながら立った姿，ただこれ雪のようなのをかかる霊水で清めた，こういう女の汗は薄紅になって流れよう．ちょいちょいと櫛を入れて，「まあ，女がこんなお転婆をいたしまして，……」．
これは修行僧と水浴の場面．これなど省略法，比喩法を巧みに取り入れて印象的である．
45その一段の婦人の姿が月を浴びて，薄い煙に包まれながら向こう岸の澈に濡れて黒い，滑らかな大きな石へ蒼味を帯びて透通って映るように見えた．
これも**44**と同一場面．女性の神秘的な妖艶美をうつすことに特に優れているようである．
23心持ちよほどの大蛇と思った，三尺，四尺，五尺四方，一丈余，段々と草の動くのが広がって，傍の渓へ一文字にさっとなびいた．はては峰も山も一斉に揺いだ．恐気を震って立ちすくむと涼しさが身にしみて，気がつくと山嵐よ．
これは大蛇が通るにつれて草の動きが段々広がって，やがてゾッと身内が寒くなるさまを視覚的・感覚的に捉らえている．「心持ち」はここでは副詞で，「感じの上では」「想像では」くらいの意．
39川上も下流も見えぬが，向こうのあの岩山，九十九折のような形，流れは五尺，三尺，一間ばかりずつ上流の方が段々遠く，飛々に岩をかがったように隠見して，いずれも月光をあびた，銀の鎧の姿，目のあたり近いのはゆるぎ糸をさばくがごとくまっ白にひるがえって．
これは孤家の女につれられて，水浴に行ったときの秘境のありさま．川の白い流れが，岩の間から，薄闇のなか段々遠く隠見するさまを視覚的に描出している．最後の助詞止めは一層余韻嫋々たる感慨を深くさせる．
27すでに目もくらんで倒れそうになると，禍はこの辺が絶頂であったとみえて，隧道を抜けた

ように，はるかに一輪のかすれた月を拝んだのは，蛭の林の出口なので．
蒼空のもとにうっすらと白い昼の月を見た．今まで山蛭に悩まされたのがひどかっただけ，よけいに嬉しく，「月を拝んだ」ということばも生きて来る．こちら側は蒼空が広がり茅蜩(ひぐらし)が鳴いている別天地．蛭の森からこの別天地に出たのを「隧道を抜けたように」と表現した．これらの簡単なさりげないことばを，われわれは印象深く聞くことができる．
76翌朝袂を分って，雪中山越(やまごえ)にかかるのを，名残惜しく見送ると，ちらちらと雪の降るなかをしだいに高く坂道を上る聖(ひじり)の姿，あたかも雲に駕してゆくように見えたのである．
ちらちらと雪の降るなかを，高野聖がすべてを語りおえて，さて何事もなかったように，淡々と去って行く．その後姿のけだかさに思わず若い男は打たれて，あたかも雲に駕して行くようだと実感した．強い鮮烈なイメージを与える，この作品末尾のことばである．
(2)比喩的表現
先ず最初に，登場人物をユーモアに富んだ呼び名で呼んだり，語りの中に出てくる動物を他の動物の名で呼んだりしているのをあげると，
24見ると海鼡(なまこ)を裂いたような目も口もない者じゃが，動物には違いない，……いま折り曲(ひじ)げた肱の処へつるりと垂れかかっているのは，同じ形をした，幅が五分，丈(たけ)が三寸ばかりの山海鼡(やまなまこ)．
これは修行僧が山中で蛭の大群に襲われるところであるが，蛭ということはなかなか明かさない．そして比喩的に「海鼡」「山海鼡」とのみ述べておいて，相手がなんだろうといい加減じれたところでやっと「こいつは蛭(ひる)じゃよ」と正体をあかす．読者や聞き手を興味的に誘導する鏡花一流の常套手段である．
28谷川の音を聞くと我身で持てあます蛭の吸殻をマッ逆(さかさま)に投げ込んで，水に浸したらさぞいい心持であろうと……．
これはさんざん蛭に血を吸われた自分のからだを「蛭の吸殻」とおどけて言ったもの．
27これならば猿の餌食(えじき)になっても一思(ひとおもい)に死ねるからと……，小僧さん，調子はずれに竹の杖を肩にかついで，すたこら遁(に)げたわ．
これも蛭になやまされ，死ぬ思いの自分を人ごとのようにとぼけて「小僧さん」と客観的につき放した表現．緊張した場面でこのことばを聞くと思わずホッとするのである．
45その時小犬ほどな鼡色の小坊主(うしろ)が……背後から婦人の背中へぴったり．
これも呼び名の滑稽さと，「猿」という正体を容易に明かさない，例の興味への誘導法．
60座が白けて，しばらく言葉が途絶えたうちに所在がないので，唄うたいの太夫退屈したと見えて……．
「太夫」とは五位の通称で，勝れた芸人に送られる称号であるが，ここは木曽節を巧みにうたった白痴の男を口軽にふざけて呼んだ．
次に喩えるものが奇抜だと思われるものを拾ってみると，
22ここで倒れては温気(うんき)で蒸(むし)殺されるばかりじゃと，我身(わがみ)で我身を激(はげ)まして首筋を取って引き立てるようにして峠の方へ．
これは多数の大蛇に襲われて，修行僧が逃げるところの描写で，われとわが身をはげまし，勇を鼓して走り出すのを，あたかも誰か別の人間がおって，僧の首筋を取って引き立てるかのように力強く表現した．
29足は忘れたか投げ出した，腰がなくば暖簾を立てたように畳まれそうな，年紀(とし)がそれでいて二十二三……．
白痴の男は不具で足が立たない，腰の力でどうにか上体を持ちこたえているものの，もしそ

の腰がなければへなへなとくずおれるような状態なのを，支えのない暖簾を立てようとすればばくたくたと畳まれてしまうと比喩的表現をしたのである．「足は忘れたか投げ出した」は，不具のため足の自由が利かないのを，足のはたらきを忘れたかのように投げ出しているの意．

23この折りから聞こえはじめたのはどッという山彦に伝わる響き，ちょうど山の奥に風が渦巻いてそこから吹き起こる穴があいたように感じられる．

穴から風が勢よく吹き出して来るように，山彦に伝わる響きがドッと聞こえて来たという表現．

29足は忘れたか投げ出した，……口をあんぐりやった上唇で巻き込めよう鼻の低さ，出額・五分刈の伸びたのが前は鶏冠のごとくになって，頸脚へはねて耳にかぶさった，唖か，白痴か，これから蛙になろうとするような少年．

白痴の男が足を投げ出し，口をあんぐりやった状態を，これから蛙になろうとする赤ん坊の蛙に見たてた．

59第一その清らかな涼しい声という者は，とうていこの少年の咽喉から出たものではない．まず前の世のこの白痴の身が，冥土から管でそのふくれた腹へ通わして寄越すほどに聞こえましたよ．

この白痴の少年が非常にうまく木曽節をうたったのを，この世の彼にはあり得ないこととして，この世に白痴で生まれる前の，正常なときの彼があの世から管を通して美声を送ったと見た．

62その時は早や，夜がものに譬えると谷の底じゃ，白痴がだらしのない寝息も聞こえなくなると，たちまち戸の外にものの気勢がしてきた．

これは真夜中を谷の底にたとえたもの．

(3)掛詞的表現

25呆気に取られてみるみるうちに，下の方から縮みながら，ぶくぶくと太っていく……．

山蛭が人間の生き血を吸って太って行く状態を叙したもの．「みるみるうちに」は，上の句に対しては，「呆気に取られて見る」というふうに動詞の働きをなし，下の句に対しては，「みるみるうちに太っていく」というふうに副詞的な働きをなしている．

32山の高さも谷の深さも底の知れない一軒家の婦人の言葉とは思うたが……．

山の高さと谷の深さが測り知れないというのと，魔性の女の言った不可思議な意味深長なことばの真意をつかみかねるのとを掛けた．

75天狗道にも三熱の苦悩，髪が乱れ，色が蒼ざめ，胸がやせて手足が細れば，谷川を浴びると旧のとおり，それこそ水が垂るばかり，……．

これは谷川の水を浴びて水が垂るというのと，水も垂るばかりのいい女というのとが掛けてある．ちなみに，ここでは天狗も魔女も深山に住む妖怪なので，魔女を天狗にたとえた．

26（蛭が）草鞋をはいた足の甲へも落ちた上へまた累り，並んだわきへまた付着いて爪先も分らなくなった．こうして活きてると思うだけ脈を打って血を吸うような，思いなしか一ツ一ツ伸縮をするようなのを見るから気が遠くなって，……．

この「脈を打って」は，人が生きて脈を打っている，またおそろしい目に合って動悸がしているというのと，下句に対して，脈を打って血を吸う，ゴクゴク血を吸うというのとを掛けている．

(4) 興味への誘導表現

62（老僧のことば）ほほう，この若狭の商人はどこへか泊ったと見える，何か愉快い夢でも見

ているかな．（同宿の若い男のことば）どうぞその後を，それから．と聞く身には他事をいううちがもどかしく，膠もなく続きを促した．

これは，若い男が興味を覚えて早く続きを聞きたいと思うのに，老僧はわざととぼけて，本筋には何の関係もない事をながながと語る．このためいよいよ相手が興味をそそられることを計算しての行為である．

52（婦人は）手をしなやかに空ざまにして，二三度鬣をなでたが．（改行）大きな鼻面の正面にすっくり立った．

助詞止めにし，しかも改行したのは，次の動作の前にポーズを取り，さてこれから馬に対し何をするかと気を持たせるためである．

69私は思わずさえぎった．（改行）お上人？

ここで章を打ち切り，興味を次章につなぐやり方．「私」とは同宿の若い男．したがって次の「お上人？」という呼びかけは彼のものである．ここは魔性の女の正体がまさに語り出されんとする一つのクライマックスで，思わず語りの中に若い男が口を入れたのである．それを次の二十六章で「上人はうなずきながらつぶやいて」「いや，まず聞かっしゃい」といって，孤家の親仁から聞いたこの女の故事来歴を長々と語りはじめるのである．

40今でもこうやって見ますと恐いようでございます，と屈んで二の腕の処を洗っていると．（改行）あれ，貴僧，そんな行儀のいいことをしていらしってはお召が濡れます．……すっぱり裸体になってお洗いなさいまし，私が流して上げましょう．

これは若い修行僧と魔性の女が二人で水浴に来たところ．「二の腕を洗っていると」は，修行僧が女の手前をはばかって，着衣のまま腕まくりをして洗っているのである．これも「洗っていると」と助詞止めで老僧の話はポツンと切れ，聞き手の反応を見，聞き手が固唾をのんでいると見るや，おもむろに次を語り出すのである．

62獣の跫音のようで，さまで遠くの方から歩いて来たのではないよう，……しばらくすると，今そやつが正面の戸に近づいたなと思ったのが，羊の鳴声になる．

これは最後になって「羊」ということが分るのであって，それまで何であろうと相手に聞き耳を立てさせる手法であることにはかわりはない．

63むささびか知らぬが，キッキッといって屋の棟へ，やがておよそ小山ほどあろうと気取られるのが胸を圧すほどに近づいてきて，牛が鳴いた．

これも**62**と同じ手法．ただし**63**は，「やがて……」以下の文に主語の転換が見られる．前半は「小山ほどあろうと気取られるのが」が主語で，後半は「牛が」が主語．この二つの主語は実質は同一物である．このような構文が鏡花の文の難解である一因となっている．

45その時小犬ほどな黒色の小坊主が，ちょこちょことやって来て，あなやと思うと，崖から横にひょいと，背後から婦人の背中へぴったり．（改行）裸体の立姿は腰から消えたようになって抱きついたものがある．

これは「ぴったり」と副詞止めの文になっているが，次の文に「抱きついた」という語があるので，自明のこととして重複を避けたもの．

「裸体の……」以下の文は，**63**と同じく主語転換の手法を用いている．すなわち，「裸体の立姿は」と「抱きついたものが」とが主語．この場合の両主語は同一物ではない．ここに到っても抱きついたものは「小坊主」とは分っていても，実体は依然はっきりしない．七行もあとになってはじめて「猿」であることが判明する．これも鏡花流の表現法・ついでながら「腰から消えたようになって」は，女がおどろいてしゃがんだのか，猿のからだにかくれて見えない

のか，聞き手の判断にまかせている．

文体について

鏡花の文章は非常に特徴がある．それらについて総括して述べてみよう．

(1) 一つ一つの文が非常に長い．その反面，読点（,）はかなり短く打ってある．波多野完治氏の「文章心理学入門」によると，日本の文章では一つの文で短いのは25～30字ぐらい，長いのでも50～60字が普通であるという．ところが鏡花の文になると，70～80字，多いのになると200字前後のものもある．

文が長い理由として，先ず第一に，主語・述語・修飾語それぞれの中にさらに複雑な修飾語がつくといった具合に，修飾語が極めて多いことが挙げられる．二，三の例をあげると，

15路はここで二条になって，一条はこれからすぐに坂になって上りも急なり，草も両方から生茂ったのが，路傍のその角の処にある，それこそ四抱，そうさな，五抱もあろうという一本の桧の，背後へうねって切り出したような大巖が二ツ三ツ四ツと並んで，上の方へ層なってその背後へ通じているが，私が見当をつけて，心組んだのはこっちではないので，やっぱり今まで歩いてきたその幅の広いなだらかな方がまさしく本道，あと二里足らず行けば山になって，それからが峠になるはず．（206字―句読点は除外，以下同じ．）

この文の本筋を理解し易くするために，修飾語の一部を除いて示すと，

A 主語――路は　述語――ここで二条になって，

B { 主語 { ―― 一条は
　　 ―― これから……両方から生茂ったの（道）が，
　 述語――通じているが，

C { 主語――私が心組んだのは
　 述語――こっちでないので（アル）．

D { 主語――幅の広いなだらかな方が，
　 述語――まさしく本道（デアッテ），あと二里足らず行けば山になってそれからが峠になるはず（ダ）．

――線の部分が骨子で，他は大体みな修飾語と考えることができる．読点と読点との間隔が狭いのは，事物の印象をなるべく簡潔に，それだけ内容を多く盛り込もうとする意図がはたらいていると考えられる．

BはCの補足的修飾語ともいうべきもので，文の本筋には関係のないものである．しかも，これに大部分の詳細な記述をしているのは，いわれのあることで，運命のいたずらと言うか，やがて修行僧がこの道を行く羽目になり，恐ろしい出来事にあう伏線を形成している．作者はちゃんとその事を計算に入れての冗舌なのである．

13このまた万金丹の下廻りと来た日には，ご存じのとおり，千筋の単衣に小倉の帯，当節は時計をはさんでいます，脚絆，股引，これはもちろん，草鞋がけ，千草木綿の風呂敷包の角ばったのを首にゆわえて，桐油合羽を小さく畳んでこいつを真田紐で右の包につけるか，小弁慶の木綿の蝙蝠傘を一本，おきまりだね．（130字）

A { 主語――このまた万金丹の下廻りと来た日には，
　 述語――小倉の帯（ヲシメ），……時計をはさんでいます，

B
- 主語――（彼ハ）
- 述語――脚絆，股引，これはもちろん（ツケテイマスガ），
- 述語――草鞋がけ（ヲシ），
- 述語――風呂敷包の角ばったのを首にゆわえて，
- 述語――桐油合羽を……右の包につけるか，蝙蝠傘を一本（持ッテイル），

C
- 主語――（コレハ）
- 述語――おきまり（ノイデタチ）だね．

これも――線の部分が骨子で他は大体修飾語である．この文は特に省略が多く，単語の羅列が目立つが，それでいてそうゴツゴツした響きを与えないのはさすがである．

(2) 文の終止法・中止法に工夫が凝らされ，名詞止め，連体止め，助詞止め，副詞止めなどが多く，さらに述語の省略も目立つ．また漢語・俗語を巧みにないまぜている．このことが，文が長いにかかわらず，だらけず，ひきしまった変化に富んだものにしている．

(3) 読者に緊張感を持たせたり，強い印象を与えようとする場面の文章は，リズム感にあふれ，読点を細かく打って，テンポが早く，読者を退屈させない．

66まん中にまず鰐鮫(わにざめ)が口をあいたような先のとがった黒い大巌(おおいわ)が突き出ていると，上から流れてくるさッと瀬の早い谷川が，これに当たって両(ふたつ)に岐(わか)れて，およそ四丈(じょう)ばかりの滝になってどッと落ちて，また暗碧(あんぺき)に白布(しろぬの)を織って矢を射るように里へ出るのじゃが，その巌にせかれた方は六尺ばかり，これは川の一幅を裂いて糸も乱れず，一方は幅が狭い，三尺くらい，この下には雑多な岩が並ぶと見えて，ちらちらちらちらと玉の簾を百千(ももち)に砕いたよう，件(くだん)の鰐鮫の巌に，すれつ，もつれつ．

67ましてこの水上(みなかみ)は，昨日孤家(ひとつや)の婦人(おんな)と水を浴びた処と思うと，気の所為(せい)かその女滝(めたき)の中に絵のようなかの婦人(おんな)の姿が歴々(ありあり)，と浮いて出ると巻き込まれて，沈んだと思うとまた浮いて，千筋(ちすじ)に乱れる水とともにその膚(はだえ)が粉に砕けて，花片(はなびら)が散り込むような．あなやと思うとさらに，もとの顔も，胸も，乳も，手足もまったき姿となって，浮いつ沈みつ，ぱッと刻まれ，あッと見る間にまたあらわれる．

(4) 鏡花は，謡曲や西鶴の雅俗折衷文，その他戯作文等を取り入れ，特色ある自己の文体を作り上げたが，その一応の完成を「高野聖」の文章に見ることができる．その中で，エロティシズムの極致を描いた次の文はその特色をよく表している．

卑しい欲情のため，魔性の女に馬に化せられた薬売りの男が，馬市にやられるのを察知してか，動こうともせぬのを見てとるや，女が咄嗟に全裸となって馬の腹の下をくぐって男の気を興奮させて動き出させる場面で，描きようによってはいやらしい表現となるところであるが，それをあくまで美しく，圧縮自在の筆づかいによって巧みに描き出している．

53生(なま)ぬるい風のような気勢(けはい)がすると思うと，左の肩から片膚(かたはだ)を脱いだが，右の手を脱(はず)して，前へ回し，ふくらんだ胸のあたりで着ていたその単衣(ひとえ)を円(まろ)げて持ち，霞もまとわぬ姿になった．

馬は背，腹の皮をゆるめて汗もしとどに流れんばかり，突ッ張った脚もなよなよとして身震(みぶるい)をしたが，鼻面(はなづら)を地につけて一掴(ひとつかみ)の白泡(しろあわ)を吹き出したと思うと前足を折ろうとする．その時，頤(あぎと)の下へ手をかけて，片手で持っていた単衣をふわりと投げて馬の目をおおうが否や，兎は躍って，仰向(あおむ)けざまに身をひるがえし，妖気をこめて朦朧(もうろう)とした月あかりに，前足の間に膚(はだ)がはさまったと思うと，衣を脱して掻(か)い取りながら下腹を衝(つ)と潜って横に抜けて出た．

彼の文章表現は，一つの事象を述べる文・句・語が完結しないうちに，もうすぐ次の事象を述べる文・句・語が継起するという体のもので，「心余りてことば足らず」と評される一面を

持っている.

われわれは二読・三読の労をおしまないで，表現の難解の壁をくぐり抜け，なだらかな音調の中に食い入って，変転きわまりない想像の世界を的確に把握せねばならない.

——完——